

福岡市主婦卓球愛好会における自律性の担保の条件 とは何か：愛好会の活動初期に関わった女性たちの 参加と「ケア」に着目して

中山, 博晶
九州大学大学院人間環境学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7172581>

出版情報：社会教育研究紀要. 5, pp.51-57, 2024-02-29. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University
バージョン：
権利関係：



福岡市主婦卓球愛好会における自律性の担保の条件とは何か —愛好会の活動初期に関わった女性たちの参加と「ケア」に着目して—

What are the Conditions for Ensuring Autonomy in the Table Tennis Association of Housewives in Fukuoka City?

— Focus on the Participation and “Care” of Women Involved in the Early Stage of Activities —

中山 博 晶^{*}
Nakayama Hiroaki

1. 福岡市主婦卓球愛好会の自律性への問い

本論の目的は福岡市主婦卓球愛好会（以下、愛好会）において、社会教育関係団体としての自律性はどのように支えられてきたのか、その条件を再考することである。ここでの自律性とは、行政機関や家族といった外部から干渉を受けることなく、自主的にかつ民主的に団体運営を行うことを指している。福岡市の公民館を基盤に活動する愛好会は、活動初期において行政交渉を重ね、市民体育館の施設利用や教育委員会の後援など、自律的に活動する基盤をつくりあげてきた。本論ではこうした愛好会の自律性を、あえて組織運営面からだけでなく、会員の多くがそれぞれの家庭で家事・育児を担っていたという生活者性にも注目して検討する。

社会教育研究の中で1960～70年代の女性を中心とした社会教育関係団体・サークル活動は、男女の性別役割意識の克服と、女性問題学習の組織化という観点から注目を集めてきた¹⁾。1971年発足の愛好会もまたこうした女性の団体・サークル活動の一系譜に位置づけることができる²⁾。そのなかで先行研究では特に愛好会の自律性を支える卓越した組織運営のあり方が取り上げられてきた。例えば愛好会独自の民主的な大会運営方式である「愛好会方式³⁾」と、その愛好会方式を支えるために組織化された「学習会」「リーダー研修会」は、会の中心的な特徴として論じられている⁴⁾。

こうした愛好会の組織運営面に着目した評価は、実際に愛好会の活動を支えた指導者からもなされてきた。公民館主事の田岡鎮男（1988）は、それまでのスポーツ組織の運営は男性に任せることが当たり前であり、女性たちは従属的に位置づけられていたのに対し、愛好会はそうした「思潮や概念からりっぱに脱却し、女たちだけの理念と力で運営され続けてきた」として、その組織運営の意義に言及している⁵⁾。また「主婦の卓球」に対して「余分なお遊び」とみる向きがあることを批判し、愛好会の中でも「積極的な主婦の生きるための手段」という自覚を「主婦ひとりひとり」がもつ必要があると指摘する⁶⁾。つまりここでは、愛好会での組織運営のなかで、女性たちが自覚をもって「女の自立、女の解放という根源的な命題を切り開く」ことが求められたのであった⁷⁾。

しかし、愛好会の組織運営の卓越性に着目する視点からでは、女性たちがなぜ愛好会に継続的に参加したのか、あるいはどのようにして活動に参加し続けることができたのか、その参加の理由や参加を保障した条件は十分に説明できないように思われる。というのも、1971年の愛好会結成当時は多くの会員が「主

^{*}九州大学大学院人間環境学府博士後期課程／日本学術振興会特別研究員（DC2）

婦」であり、家庭内での家事や育児などの無償のケア労働を担っていたことから、愛好会の活動に自由に参加できる状況ではなかったと考えられる。また、田岡が指摘していたように、当時は「主婦の卓球」が「余分なお遊び」と見られており、愛好会の活動への参加に対しては風当たりが強かった。そのため、愛好会が外部からの干渉を受けることなく自律的に活動するには、当時の女性たちの生活者性を踏まえて会員の活動への十全な参加が保障される必要があった。

そこで本論では、会員の生活者性への関心を軸に、女性たちの活動への参加のあり様に注目して、愛好会の自律性担保の条件を検討する。その際、分析のキー概念として「ケア」を取り上げる。本論においてケアとは相互依存的な主体観を前提に、他者のニーズへの応答を表す関係的な概念とする⁸⁾。結論を先取りすると、愛好会の活動のベースには、ケアの思想・実践があったと考えられる。例えば愛好会の『会報』を分析すると、女性たちがお互いに気遣い合い、インフォーマルな交流を広げ、全員が楽しめるように場をつくろうとする姿勢が見受けられるが、それは「女性の自立」というよりも、ケア的なものであったと考えられる。そこで本論ではケア概念を手がかりに、愛好会の自律性担保の条件について考察したい。なお、ケアは女性の本質的な性質ではなく、社会的な状況によって創り出されているものと理解されたい。

本論の調査方法としては、愛好会の自律的な活動の基盤をつくりあげた前田恒子の会長時代の『会報』（1～10号、記念特集号：1974～1983年）及び、愛好会20年の歩みを振り返った講演記録（『会報』19号）を中心とした史料分析、そして愛好会の活動を紹介したドキュメンタリー映像『社会体育の拡がり求めて―愛好会活動の中から―』（1977年）の分析を行った。さらに前田会長時代から愛好会に参加している田中理恵子さん、中原圭子さんへのインタビュー調査を行った。インタビュー調査では、愛好会の会員と行政や家族・地域社会との葛藤関係を念頭に、主に①愛好会の活動に参加した理由と経緯、②愛好会の活動に参加することの意味について尋ねた。

2. 愛好会における自律性の確立：外部組織との関係から

愛好会において自律性をどのように確立し、担保するのかは、結成当初より課題であった。まずは愛好会結成十周年記念の座談会の記録「愛好会をふりかえって十年を語る」⁹⁾及び、愛好会結成二十周年講演の記録「いま愛好会をふりかえる」¹⁰⁾を手掛かりに、愛好会がどのように自律性を確立しようとしたのか、確認したい。

愛好会結成のきっかけは、福岡市の公民館で開かれた婦人の卓球教室であった。当時福岡市教育委員会の委託を受けて卓球協会から指導者が複数の公民館に派遣され、週1回、2時間×10回で、初心者向けの講習が行われていた。そして講習を終えると、卓球教室の指導者から声がかかり、1971年8月に5つの公民館（舞鶴クラブ、原、高宮、千早、春吉）が集まって交流試合が初開催された。当時主婦がサークル活動に参加することは地域の人から白い目で見られることであり、また練習方法も分からなかったことから、せっかくできた卓球の公民館サークルも自然消滅しかけていた。そのため交流試合が組まれたのであった。その後、5つの公民館から加入の申し込みがあった。そして指導者から「一つの会の組織としてやった方がいい」というアドバイスを受けた¹¹⁾ことから、愛好会は誕生した。

しかし、結成当初の活動はとても順調とは言えなかった。当時問題となったのは大きく2つあった。1つは、愛好会結成のきっかけとなった指導者との関係である。愛好会の組織化を助言した指導者は『…（中略）…あなたたちの会だから、あなたたちでやりなさい』と言いながらも¹²⁾、突然名誉会長を名乗りだすという事態が発生していた。また、2つ目の問題は、大会試合に対する会員の不満である。当時、卓球協会の方式に倣ってトーナメント戦で試合が組まれていたことから、初心者ほとんど試合に参加できずにいた。

そこで前田会長（当時）は、各公民館サークルから出された代表者30名と公民館主事3名を交えた話し合いを行い、「一人立ちして、自分たちの手で初心者が参加しても楽しめる大会を作っていこう」（原文ママ）という結論を出した¹³⁾。またそれまで助言をいただいていた指導者に対しては、独立しながらも「指導者として教えを乞いたい」とお願いをしたが、その真意は十分に伝わらず、愛好会は新しい技術指導者を探すことになった。

その後も愛好会は多くの問題と直面することになる。指導者から独立して以来、大会会場の予約が取れず、試合球等の寄贈が止まることもあった。また、当時は主婦のサークルが教育委員会からの後援を受けることも困難であった。

そのため愛好会は「学習」を重ねることで、自ら活動の基盤をつくりあげる。愛好会の活動史を分析した相戸晴子（2003）によれば、愛好会はこうした多くの困難に直面する中で「理論をもつこと」、すなわち「学習」の必要性を学んだと指摘する¹⁴⁾。そしてその学習の成果は、愛好会内部の問題解決に繋がる一方で、外部に対しては交渉という形で還元された。例えば前田会長は大会会場の確保のために市民体育館へ出向き、また社会体育課や地元の新聞社・放送局に後援のお願いをしに行ったと語っている¹⁵⁾。さらに卓球指導者に関しても、スポーツメーカーに寄贈品のお願いの手紙を送っていたことがきっかけで小蘭江慶二さんと出会い、そのまま指導をお願いすることになる¹⁶⁾。こうした外部との交渉を経て、愛好会は自律的に活動する基盤をつくりあげたのであった。

3. 愛好会会員の活動への十全な参加の保障

(1) 主婦としての孤独・孤立感とつながりの希求

愛好会の自律性が揺らぐ要因は他にもあった。特に家族・地域社会との関係から、活動への参加に対し白い目で見られる、ということが起きていた。では、主婦卓球への風当たりが強い状況の中で、なぜ女性たちは活動に参加したのだろうか。

先に触れた前田会長が当初卓球に参加したのは、主婦として生活するなかでの孤独・孤立感やさびしさからであった。

夫の転勤を機に住みなれた東京より福岡に参りましたが、よその土地を知らない者にとって九州は遠い遠い島であって、知り合いのない不安と心細さで、泣く泣くこの地に参ったものでした…（中略）…卓球にかかわり合うようになりましたのも、一枚の公民館からのチラシだったのですが、当時の私はそれが卓球でなくても良かったわけで、語り合える友さえいてくださったら、手芸でもお茶の稽古ごとでも良かったのです。¹⁷⁾

こうした孤独・孤立感から愛好会に参加したのは前田会長だけではなかった。田中理恵子さんも、初めて実家のある関東から福岡に移り住んだとき、友達がいないことに加えて、家族・地域との関係から「孤立しているような状況」であったという¹⁸⁾。そのなかで、田中さんは近所の神社の社務所で卓球をしていた前田会長らと出会い、声を掛けてもらったことが一つのきっかけとなり、愛好会に参加することになる¹⁹⁾。

このように女性たちが愛好会に参加した主な理由の一つに、インフォーマルなつながりを求めていたことが挙げられる。そして、愛好会では、そうした孤独な主婦を気にかけて、声を掛ける、というコミュニケーションが図られていた。

ただし、愛好会でつながりが生まれたとしても、夫の転勤によって再びつながりが切れるという事態も

起きていた。そこで『会報』では、夫の転勤に伴って離れた人の声が掲載されている²⁰⁾。また、前田会長は、福岡を離れた元会員から電話があり、近況を話してもらったというエピソードを紹介している²¹⁾。愛好会に直接的に関わりを持てなくなった元会員に対しても、『会報』を媒介に、つながりを保つ実践が展開されていたのであった。

このように愛好会では、女性たちのつながりを大事にしてきた。それは、女性たちが歴史的にも社会的にも周縁化させられているために、希求されたものであった。孤独・孤立感を抱えていたからこそ、お互いに気をかけ、声をかけ、つながりが維持されたのである。

(2) 女性たちが安心して声を出すことができる場づくり

では、愛好会の会員たちはなぜ卓球への参加だけでなく、「学習会」や「リーダー研修会」、そして会の方針を決める話し合いの場にも参加したのだろうか。

当時、子育てをしながら愛好会の役員を引き受けた中原圭子さんは「自分たちでやろうよ」と声を出すこと、決めることが新鮮だったことを語った。

自分の意見を言うとか、そんな場面は少なかったみたい。そんなときですから。亭主関白が大量生産されていた時代です。声を出す、っていう。大きな何をしたいとか、そうじゃなくて。ちょっとした抵抗。そういうのができた、愛好会の中では、ですね。一つ一つ積み重なっていくのが楽しかったです。²²⁾

当時、何らかの意思決定の場で声を出すということは、女性たちにとって困難を伴うものであった。しかし家庭や社会の中で、沈黙させられていた女性たちも、愛好会では「声を出す」ことができたようである。そしてそれは「楽し」さを伴うものであった。

『会報』8号には、田中さんが初めて愛好会のリーダー研修会に参加した際の感想が掲載されている。そこでは、当初幼子がいるため「ものすごく面倒」と思っていた田中さんが、いざ研修会に参加してみると、意外にも部屋の雰囲気も明るく、同じように初めての人が多かったことから、不安が次第に消え、そして研修が始まると「マイクを持って皆の前で話すなど、主婦という肩書がついてからは一度も味わったことのない興奮」を感じたことが述べられている²³⁾。ここでもやはり、主婦であるがゆえに経験できなかった、人前で声を出すことの面白さが述べられたのであった。

さらにここで強調したいのは、愛好会の役員会やリーダー研修会が、女性たちにとって安心して声を出すことができる場であったことである。中原さんが「ちょっとした抵抗。そういうのができた、愛好会の中では」と語っているように、当時の女性たちが家庭やその他の場では実現しえなかった「声を出す」という行為が、愛好会では可能であった。当時の女性たちにとって話し合いの場に参加し、声を出すことは「楽しさ」や「興奮」といった価値を伴うものであり、また愛好会では「主婦」として抑圧されていた女性たちの声を受け止める場を創り出していた。

(3) 子連れの主婦も参加できるように配慮すること

女性たちにとって愛好会の活動に参加することは「楽しさ」を伴うものであったが、他方で継続的に活動に参加することは容易ではなかった。特に子育て中の女性たちは大会や練習に参加したくても、幼い子どもから目を離すことができないため参加が難しい状況であった。また、他の参加者からは、子連れの参加を冷ややかに見る向きがあった。そのため、愛好会の中で子ども連れの主婦の参加は課題となっていた。

そこで愛好会は大会試合中の子どもの託児の取り組みを始める。例えば『会報』3号には、「子供係」に

子どもを預けた側の声と、実際に「子供係」を担当した側の声がそれぞれ紹介されている。そのなかでは「お弁当、水筒、おやつは各自持たせるようにして下さい」等、具体的な託児のあり方についての要望が載せられており、会員間でのコミュニケーションが図られていた²⁴⁾。また「子供係」に預けた会員からは「子供を見ながら試合をするという事はできず、結果的に預けることになり大変助かった。今度からは自分たちが子供係に協力したいと思った」という意見が出ている²⁵⁾。このように愛好会の中で「子供係」の必要性が徐々に広がったようである。

そしてその後のリーダー研修会では、学習テーマに子どもの託児のあり方を取り上げた²⁶⁾。そこでは大会だけでなく練習中でも子連れの母親が参加できるように、サークルのメンバーの協力が大切であることが確認されている²⁷⁾。さらに中原氏は当時の子どもの託児のあり方について以下のように語った。

子どもがいたら、やっぱりその子どもの人権を考えてあげなくちゃいけないから、一緒に楽しい時間を過ごそうね、って、そういうのが前提だったような気がします。²⁸⁾

このように愛好会では、子どもの連れの主婦であっても活動に参加できるように、会員同士で託児のあり方について学び、実践してきた²⁹⁾。そしてその一人一人の参加を大事にする観点は、子どもにも向けられていた。ここでは、誰もが「一緒に楽しい時間を過ごす」ことに価値が置かれていたのである。

以上のように、愛好会の会員の生活者性に注目すると、当時の女性たちの愛好会活動への参加は容易ではなく、愛好会の中で参加のハードルを下げようと創意工夫が図られていたことが確認できる。そして社会的に周縁化させられてきたからこそ、女性たちはつながりを求め、自ら楽しく活動できる環境を創り出していたことが明らかになった。

4. 愛好会の自律性担保の条件の再考：ケア責任の再配分の視点から

ここで愛好会において、会員の一人一人を尊重し、それぞれのニーズに応答して、インフォーマルなつながりを創造・維持しようとしたり、子どもの託児を実践したりする動きを、ケア概念を用いて考察したい。特に本論で取り上げるのは、フェミニズムの思潮からケアと民主主義の関係を問う、アメリカの政治学者ジョアン・トロントの議論である。

トロント（2015＝2020）は、ケア概念について、Berenice Fisher と共に提起した「世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動」という定義を採用し、ケアが端的に「必要を満たすもの」であり、また「常に関係的」（傍点ママ）であることを指摘する³⁰⁾。そのうえで「あるニーズへの一つひとつの応答には、権力関係が含まれる」ため、ケアは政治的であると述べた³¹⁾。ここでは誰かのニーズを満たすために、どのような方法でケアを提供するのか、ケアの提供者とその受け手や家族など、関係するアクターが集まって決定するという意味での「政治」の存在が指摘されたのである。

こうしたトロントの議論の主眼は、ケア責任の再配分を中心に「あらゆるひとが、できるかぎり完全に、こうしたケアの配分に参加できることを保障する」（傍点ママ）という意味での新たな民主主義のかたちを構想することにあつた³²⁾。フェミニスト政治学者の岡野八代（2020）によれば、トロントの主張の背景の一つには1980年代のアメリカで白人女性の社会進出が進む一方で、ケアの負担がより経済的に貧しく、弱い立場にある有色の女性、移民女性・男性に移るという事態に直面したことが挙げられるという³³⁾。そのためトロントは、誰もがニーズを抱える主体であることを前提に、不平等に配分されているケアの負担を私的に閉じることなく公的に開き、民主主義の再定義を試みたのであった。

こうしたケア責任の再配分は日常生活の次元での意思決定としての政治に関わるものであり、愛好会が

大会中の子どもの託児に率先して取り組んできたことと重なる。例えば『会報』3号には、子連れの母親の試合参加を保障する方向性が示されている。

子供がうろついて試合がやりにくかったという意見が多かった様ですが参加している人ほとんどが母親であるという事をしっかり念頭においてどうしたら「子供連れでも楽しく参加できるか」という事を大会運営と同等の問題として考え良い方向に持って行くようにお互いに話し合って行きましょう。³⁴⁾

家庭の中で私的に閉じられがちな子どものケア責任も、少なくとも愛好会では再配分する方途が開かれた。そして、例えば子連れの母親であっても試合に参加しやすい環境が整備された。お互いにニーズを抱える主体だからこそ「『子供連れでも楽しく参加できるか』という事を大会運営と同等の問題として考え」、「お互いに話し合って」、試合中の子どもの託児のあり方を決定したのであった。

また、こうした愛好会でのケアを担ったのは会員だけではなかった。愛好会の活動を紹介したドキュメンタリー映像『社会体育の拡がり求めて―愛好会活動の中から―』では、大会中の子どもの保育の場面が映し出されている。そこでは、子ども達と大人が室内施設でボール遊びをしている様子が映され、以下のナレーションが流れる。

今日は日曜日。あいにく雨になり、いつもは公園で元気に遊びまわっている60人近い子どもたちも第二競技場で、こども劇場³⁵⁾のお兄さんやお姉さん、係のお母さんたちと一緒に汗を流して、楽しく走りまわっています。³⁶⁾

ここで登場するのは、愛好会の会員だけではなく、ボランティアの「お兄さん」「お姉さん」であった。子どものケア責任を愛好会外部にも開くことで、誰もが平等に大会を楽しむことができる環境を創り出したのであった。

以上のように愛好会の女性たちは、日常적으로お互いを気にかけて、配慮し、さらに各々のニーズに応えるために意思決定の場を開いてきた。そしてこれらを踏まえると、愛好会の自律性を支えた条件は二つあったと考えられる。一つは、先行研究や田岡が指摘した組織運営の卓越性であり、そしてもう一つは本論が明らかにしたケアをベースとした場・環境づくりである。前者については女性が自立的に運営に参加し、外部団体と交渉することが重視されるが、後者はお互いにニーズを抱えた主体であることを前提に、インフォーマルなつながりづくりや、安心して話し合うことのできる場づくりが大事にされる。愛好会の自律性はこうした二つの条件によって担保されてきたと言えるだろう。

【注】

- 1) 野々村恵子・上村千賀子「女性の学びとエンパワーメント」日本社会教育学会編『講座 現代社会教育の理論Ⅱ 現代的人権と社会教育の価値』東洋館出版社、2004年、pp.237-257.
- 2) 詳しくは松永圭世「福岡市主婦卓球愛好会の活動を通したオルタナティブな主婦像の構築：『主婦』という立場性に対する会員の意識変容に着目して」（『社会教育研究紀要』（九州大学社会教育研究室）第5号、2024年）を参照されたい.
- 3) 親善大会では、初心者も上級者も一緒に卓球を楽しむことができるように、同じレベルでの総当たりのチーム戦や、ダブルスのペアを特定の人で固定せずに必ず入れ替える等の工夫が施されている。
- 4) 伊藤恵造「地域スポーツ組織の発展の『鍵』に関する研究：福岡市主婦卓球愛好会の事例」『日本体育大学紀要』第32巻2号、2003年、p.119.
- 5) 田岡鎮男『さいはての社会教育』（自費出版）、1988年、p.324.
- 6) 同上、p.325.

- 7) 同上, p.327.
- 8) 本論のケア概念の理解は、キャロル・ギリガン（川本隆史・山辺恵理子・米典子訳）『もうひとつの声で：心理学の理論とケアの倫理』（風行社、2018年）に影響を受けている。
- 9) 執筆者不明「愛好会をふりかえて十年を語る」『会報』9号、1981年、pp.21-34.
- 10) 前田恒子「いま愛好会をふりかえる：二十周年講演から」『会報』19号、1991年、pp.5-20.
- 11) 執筆者不明、同上、1981年、p.25.
- 12) 同上、p.26.
- 13) 前田恒子、同上、1991年、p.9.
- 14) 相戸晴子「福岡市公民館における“主婦卓球愛好会”のサークル学習活動史」『福岡公民館史研究：社会教育思想研究』第2号（九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース社会教育思想論研究室）、2003年、p.114.
- 15) 前田恒子、前掲、1991年、p.10.
- 16) 鎌田宜佑「地域スポーツ組織の発展を支える条件に関する考察—スポーツ指導者の指導観の深まりに着目して—」『社会教育研究紀要』（九州大学社会教育研究室）第5号、2024年.
- 17) 前田恒子「人生と出逢い」『愛好会会報記念特集号』1983年、p.103.
- 18) 田中理恵子さんへのインタビュー調査（2023年3月2日）
- 19) 田中理恵子さんへのインタビュー調査（2023年3月2日）
- 20) 中地信子「さようなら！愛好会会員の皆様」『会報』7号、1979年、p.13.
- 21) 前田恒子「季節によせて」『会報』8号、1980年、pp.11-12.
- 22) 中原圭子さんへのインタビュー調査（2023年3月23日）
- 23) 田中理恵子「おさな子を連れて」『会報』8号、1980年、pp.26-28.
- 24) 執筆者不明『卓球愛好会会報』3号、1974年、p.1.
- 25) 執筆者不明「六月五日評議委員会 反省会より 於毎日会館」『卓球愛好会会報』4号、1975年、p.1.
- 26) 『会報』7号及び8号によれば、1978年の第5回のリーダー研修会で「練習中の子どもの問題」についてグループ討議がなされ、翌年も同様に「託児をどう考えるか」が取り上げられた。
- 27) 執筆者不明「リーダー研修会」『会報』7号、1979年、p.22. 執筆者不明「リーダー研修会」『会報』8号、1980年、p.21.
- 28) 中原圭子さんへのインタビュー調査（2023年3月23日）
- 29) 中原さんは、東京都国立市公民館の保育実践をモデルに愛好会でも保育について学び、実践してきたと語っている。中原圭子さんへのインタビュー調査（2023年3月23日）
- 30) C・ジョアン・トロント（岡野八代訳・著）『ケアするのは誰か？—新しい民主主義のかたちへ』白澤社、2020年、pp.24-25.
- 31) 同上、p.32.
- 32) 同上、p.39.
- 33) 同上、p.86.
- 34) 執筆者不明『卓球愛好会会報』3号、1974年、p.1.
- 35) 親子を中心に文化芸術の鑑賞等を行う市民団体。1966年に福岡で活動が始まり、全国各地で団体が設立された。
- 36) 福岡市主婦卓球愛好会『社会体育の拡がりを求めて—愛好会活動の中から—』1977年。なお愛好会よりドキュメンタリー映像のDVDを提供いただいた。